

2015年〈平成27年〉9月9日(水曜日)



岡本 修部長

空調機器総合メーカー、新晃工業(社長＝武田昇三氏、本社・大阪市北区南森町1-4-5)は、中央熱源方式(セントラル方式)空調システム向けにエアハンドリングユニット(AHU)、ファンコイルユニット(FCU)など二次側トップランナーとして幅広い空調機器を供給する。一般に中央熱源方式はリニューアル時、別方式への変更に伴う工事の負担が発生せず、全体としてコスト面での優位性を



藤原 博史副部長

持つ。また、熱源や二次側・補器類などユニット単位でのパッケージング

新晃工業

二次側トップの製品力 空調節電狙いに監視装置開発

プを図りやすいといった諸点が特徴とされる。セントラルでは設備設計者の意図するところが可能になる(技術部・藤原博史副部長)との言葉に同方式の利点が集約されるが、新晃工業は、そうした同方式の良さを最大限

に生かす空調機分野で最前線を走り、建築物の目的に応じた多彩な空調システムに対応している。同社の持てる技術・開発力はコンパクト型空調機AJEC型、節電型空調機プラグファンシリーズ、プラグファンの進化

形であるダブルプラグファン空調機、1台の空調機に2台のファンモーターを搭載したリリーフエアAHU、フリークーリングと冷媒自然循環を組み合わせたハイブリッドエアハン、OAフロアを利した床吹出し空調システム、清浄空間のニーズにこえるクリーンルームシステム、クリーン環境を実現するエアワッシャ組込空調機などの製品群に結実する。西日本各地域では大規模市街地再開発プロジェクトや複合商業施設、大学新キャンパ

ス、総合医療施設、精密部品工場、食品工場、研究施設といった新築案件が進行しており、同社が技術力を発揮する舞台となっている。近年、旺盛な需要が続く分野の一つに半導体／電子部品関連の生産工場

があるが、それらの拠点では「アウトガス対策を中心に温湿度、気流などの要因に対して緻密で安定した制御が求められる(技術部長・岡本修氏)とし、エアワッシャ組込空調機の出番となっている。同空調機は、処理空気に水を接触させ、外気中に含まれる水溶性のガス成分を除去する方式として滴下式とスプレー式がある。同分野向けでは大型空調機を含む案件が近く具体化される見通しだという。

最近の開発成果の一つに挙げられるのが空調設備の節電を狙いにした「エネルギー監視装置」。熱交を通過する冷温水の流量と温度を計測するこ

とで投入熱量を算出する仕組みの装置。具体的には、熱交の冷温水出入口に差圧センサと温度センサを搭載し、流量と温度を計測することで投入熱量をアウトプットさせる。どのエリアでどれくらいの量が使用されているかを監視することで効率的な省エネ・節電につながる。空調機1台ごとの熱量を容易に検出でき、特別な配管も不要。空調機の熱量監視をはじめ、デマンド制御、メンテナンス時期の判断など様々な用途に使える。省エネ・節電という大きな潮流に対する、見える化を切り口にした新晃工業の回答といえそうだ。

中央
一ビ
ける